



実践の記録◆小学校5年◆

「いっしょうけんめい」を とりもどしたい

<高知> 坂田次男

1. Nくんの感性

Nくんは五年生で一番元気者だ。幼さは残しながらも、ものごとに対する好奇心は旺盛だ。彼とは二年七か月のつきあいになるけれど、出会った当初、「これぞ子ども」とさえ私は思った。

子ども特有の野生的な感性を随所に示すNくんだが、その感性の内部には繊細さもあわせもっている。次のつづり方などは、それを表している。

ねつなのに

(三年)

六月に中ごろのことだった。夜、お母さんが体温計で熱をはかっていた。ぼくが、「ねつあるが？」

と言ったら、お母さんは、

「あるよ。」

と言った。

「どのくらい？」

と聞いたら、お母さんは、

「びねつ。」

と言って、体温計をテーブルにおいた。ぼくは、

「あしたは、仕事に行くが？」

と聞いた。お母さんは、

「行くに決まってるやろう。」

と言った。ぼくは、

「休んだほうがいいと思うで。」

と言った。お母さんは、

「休みたいけど、休めんがよ。」

と言って、お風呂へ入っていった。ぼくは、

「休んだほうがいいのにな。」

と言った。

次の日起きたら、朝の五時三十一分だった。けど、もうお母さんは起きて、ごはんを作っていた。お母さんは、ねつでハアハア言いながら、お父さんのおべんとうを作って

いた。ぼくは、だまってずっと見ていた。お母さんがこっちを見たので、ぼくはソファのうしろにかくれた。お母さんがこっちを見るたびにかくれた。

ぼくは、六時になって出て行った。お母さんは、「ごはん食べる？」

と言って、ごはんを出してきた。そのときも、ハアハアと小さな声で言っていた。ぼくは、ごはんを食べて、

「ハアハア言いゆうけど、だいじょうぶ？」

と聞いた。お母さんは、なんにも言わないで、トイレに行った。ぼくは、お母さんが心配になって、トイレの前まで行って、かぎあなからのぞいた。中でお母さんがいない。ぼくは、そっとしてあげようと思ってなにもしなかった。

ぼくは、ふくを着がえて、紙に「行ってくるきね」と書いて、家を出て学校に行った。

この感性——実はこれがNくんをNくんたらしめている感性だと思うし、それが失われたら彼の成長は痩せ細って創造性のないものになるだろうと私は思っていた。だからお母さんにも折にふれて、「Nくんの野生の感性を大切に育てましょう」と話してきた。お母さんは、私の話を聞くたびにうなずき納得した表情を見せるのだったが、学年が上がるにつれて、わが子に対する不満を持つようになった。

2. 「いっしょうけんめい」が消えていく

Nくんは家でも学校でも叱られることが多い。特に家では、ほめられることはまず無いと言っている。それでも低学年の頃は、持ち前の元気で乗り越えてきたのだが、「おこってばかり」「ほめられたことがない」というそのことに不満を感じ始めたのは、四年生の終わりだった。

お母さんのけっこん式の時のアルバム

(四年)

お母さんのとなりでねていると、夜中にトイレに行きたくなった。ぼくは、「トイレ。」

と言って、起きた。時計を見たら三時だった。

トイレに行って、ふとんに入った。でもなかなかねつけなかった。ぼくは、(なんかないかな)と思って、明かりをつけて、タンスをあけた。すると、アルバムがあった。アルバムにはウサギのマークがあった。ぼくは、

「見一よろ。」

と言って、アルバムを開いた。

一まい目の写真には、お父さんとお母さんがのっていた。お父さんとお母さんのけっこん式の時の写真だった。ぼくは、

「うわあ。すごい。」

と言った。

お母さんが真っ白な服を着て、お父さんが黒い服を着ていた。お母さんはきれいだった。お父さんはかっこよかった。写真の中のお母さんとお父さんは、にっこりわらっていた、

ぼくは、お父さんとお母さんがこんなにわらっている顔はあまり見たことがない。お母さんが帰ってきたら、お母さんの顔はおこっている。お父さんも仕事から帰ると、いつもつかれている顔ばかりしている。

見ていると、お母さんが、

「何しゆが？」

と言った。ぼくは、びっくりしてふりかえった。お母さんは、ふとんの上でおき上がっていた。ねむたそうにしていた。ぼくは、
「アルバムがあった。」
と言った。ぼくが、
「見て見や。」
と言うと、お母さんは、
「かして。」
と言った。ぼくはアルバムを開いたまま、お母さんにわたした。お母さんは、
「このころはわかかったねえ。」
と言った。ぼくは、けっこう式の時はいうれしかったんやなあと思った。でも今は、お父さんもお母さんもけんかをすることが多い。今はうれしくないのかなと思った。
お母さんが、
「ねよう。」
と言った。ぼくはお母さんからアルバムを受け取って、タンスの上にせのびをして置いた。

フレンドリー集会の感想

(四年)

…お母さんに、「今日のげき、よかった？」と聞くと、「セリフをまちがいがすぎ。」と言った。ぼくが、「そんなにまちがっちゃった？」と聞くと、「リコーダーはよかったけど、セリフは悪かった。」と言った。ぼくは、もっとおぼえとけばよかったと思った。でも、本当はもっとほめてもらいたかった。

このフレンドリー集会の感想など、他の子どもたちのそれと比べて、Nくんの思いには暗ささえ感じる。

一度、お母さんにこのことについて話したが、お母さんはどうしても自分の子育て観や子育ての仕方を見つめなおしてみることができないようだった。

Nくんのくらしぶりにはっきりと分かる変化が現れてきたのは、五年生になっての六月だ。

友だちに自分のことについて何かを言われたら、ケンカ腰のことばを返すことが多くなった。自分の体で表現する学習のときなど、以前のような解放感がなくなってきた。人との応対ではその場その場で適当にやり過ごすような雰囲気も持ち始めた。

Nくんのそんな様子を見るたびに私には、お母さんの子育て観やお父さんを含めた家庭での問題が見え隠れするのだった。

3. 自分を見つめなおす (子も親も)

友だちに対する八つ当たりの言動が続くので、ある日私はNくんをきびしく叱った。そして、自分の心の内をありのままに書いてみなさいと求めた。しばらく遠くを見るような目で考えていたNくんだったが、やがて鉛筆を走らせ始めた。

本当はおこりたくない

(五年)

朝の班の会で、れいちゃんが、
「今日、ニュース言うのNくん。」
とぼくに言った。ぼくは、ムカツときて、
「今日、オレじゃないで。きのう言ったき。」
とおこって、強く言った。れいちゃんは、
「ごめんごめん。」

とあやまった。

その時、先生が横から、

「Nくん、どうしてそんなに人にケンカを売るみたいに言うが？」

とおこった。ぼくはビクッとして先生を見た。先生はぼくをにらんでいた。ぼくは、（ヤバイ、またおこられる）と思った。先生は、

「どうして？」

と、またおこってぼくに聞いた。ぼくは、だまったまま、まわりを見回した。みんなこっちを見ていた。みんなは、（またおこられてる）と思っているように、しせんをこっちに向けていた。先生は、

「それほどみんなにケンカを売ろうとするんやったら、班から外に出ろ。」

と言った。ぼくはだまって、つくえとイスを教室のうしろのロッカーの前まで運んだ。ぼくは、みんなにせなかを向けてすわった。

先生がちょっとおこった声で、

「朝の会を続けなさい。」

と言った。

朝の会はさきへと進んだ。ぼくは、みんなの声を聞きながら、（ぼくだって、ケンカを売ろうとしたわけじゃあないのに）と思っていた。

そのまま一時間目が始まった。ぼくが、（どうしよう、どうやってゆるしてもらおう）と考えているうちに、一時間目はすぐに終わってしまった。

二時間目が始まった。みんなは算数のプリントをしていた。ぼくは、先生の所まで行った。ぼくは、（どうせ何言ってもゆるしてくれんろうな）と思いながら、

「これからは、あんなにきつく言ったりしないので勉強をやらせてください。」

と言った。先生に、

「これからって言うことばは、もう聞きあきた。」

と言われた。ぼくは、（やっぱりゆるしてくれんかったなあ）と思って、ゆっくりイスにすわって、また考えた。

しばらくして、ぼくは、やっぱり本当の事を言おうと決めた。

先生の所に行った。先生は、イスにすわって、だれかのつづり方を読んでいた。ぼくが勇気を出して、「ぼくがいつもおこるわけは…。」

と言いかけると、先生はゆっくりこっちを向いた。ぼくは泣きそうになりながら、つまりつまり本当のことを言った。

ぼくの家は、みんなほとんど顔をそらしておこっている。特にお母さんがいつもおこっている。

お母さんはぼくの勉強や剣道のことでいつもおこる。宿題が早くできないと言っておこる。剣道が弱いと言っておこる。ぼくがお母さんに話しかけると、お母さんは、どんなことでもおこってきつく言い返してくる。そんな時は、ぼくもはらがたって、おこって言い返してしまう。

お兄ちゃんともあまり話をしない。お兄ちゃんはぼくが話しかけても、

「ふーん、あっそう。」

と、あまり話をしてくれない。中学生になってから特にそうなった。

お父さんは、話し相手をちゃんとしてくれるけど、やっぱりあまりわらったりしてくれない。

お父さんとお母さんもあまり話をしない。話すときはいつもケンカをして話している。ぼ

くは、それをしづかにじっと見ている。ケンカをとめることもできないし、話しかけてもおこられるだけだ。ケンカのあと、お母さんに話しかけても、

「なんでこうなるかわかるかえ。あんたがきちんとやらんきで。」
とまたおこられる。

それを聞いたときに、ぼくはいやになる。だからぼくは、いつもイライラしてムカついている。

前はこんなじゃなかった。家族みんなにわらいがあった。ケンカももちろんあったけど、わらいもケンカにまけないぐらいあった。

あるとき、お母さんがぼくに言った。

「母ちゃんと父ちゃん、りこんするかも知れんで。」

それを聞いたときぼくは、（りこんなんかしてほしくないな）とむねがドキドキしていた。お父さんもお母さんと同じことを言っていた。ぼくはそのことが心配で心の中にずっとある。

話しているとちゅう、なみだが目からあふれてきた。

ぼくの話が終ると、先生はぼくのりょう手をにぎった。それからぼくのむねに手をあてた。先生は、

「先生はNの本当のことを知っちゃった。先生がおこるのは、もっとNに自分の心をふり返って考えてほしかったからや。よく言えたなあ。よく考えたなあ。Nは、そういうことをよく感じる心を持ってるとんやから、それをサビつけたりしないようにがんばらないかなあ。」
と言った。ぼくは、またなみだが出てきた。

先生は、

「Nの家族にえがおがもどるようにおうえんしてあげる。」

と言った。ぼくは、うなずいた。ぼくは、本当のことを先生に話してちょっとすっきりした。

ぼくは、班にもどって、一、二時間目の勉強をやった。

このつづり方をNくんは、三日間かけて仕上げた。放課後の教室で私と二人、たまには冗談を言い合いながら、いっしょうけんめい書き上げた。彼のいっしょうけんめいな顔を私は久しぶりに見た。

後日お母さんに、この内容の話をした。お母さんは、問題は自分たちにあることは十分わかっていたし、それをなんとかしたいとは思ってはいたようだが、何をどうすればいいのわからないまま日々をくらしてきたのだという。

お母さんも悩んでいたのだ。だが、お母さんの続けてのことばは、お母さんの考え方が迷路に入っていることを示していた。

「でも、あの子はいかん。わがままやき。私のいうことは全然聞かん。私が何か言うたらものすごく暴れてどうしようもない。お兄ちゃんはそのようなことなかったのに。お父さんもいかん。できない仕事を引き受けて…、酒の量が増えて…」

悩みが不満に代わり、そのはげ口をわが子や夫に向けているようなことば。

「Nくんはあなたの子どもですよ。子育てを放棄するつもりですか？」

少し強く私は言った。お母さんはだまって下を向いた。

4. 私の不安

つづり方を書いた後、私は毎日Nくんに見せた。

「昨日は笑顔があったか？」

「うん。ちょっとあった。」

尋ねるたびに、Nくんは昨夜を思い出して、はにかみながら答える。

「このごろは笑顔が多くなったみたいやな。よかったなあ。」

「うん。前よりは増えてきたような感じ。」

そんな応答で私は、彼の家庭の笑顔の交換を想像しながら笑う。彼も笑う。

しかし、Nくんの「いっしょうけんめい」が少しずつ戻り始めたまま、夏休みに入ってしまった。この長い休みの間に、彼の家庭の笑顔と彼の「いっしょうけんめい」の姿は、どんな変化を見せるだろうか。少し不安な夏休みが開けた九月、彼の笑顔と「いっしょうけんめい」は、大きな変化を見せてはいなかった。そのことに安心と不安が入り混じる。

子どもの成長は螺旋状。まして私のやろうとしていることは、親にしかできない子育てのあり方（生活のしぶりそのもの）にからむこと。N君親子と私の時間を少し巻戻しての秋である。

(新・つづり方通信第22号 2008/11/8より)

